

卓 話

平成 18 年 3 月 7 日

「日本の森づくり」

社団法人岐阜県林業経営者協会青年部会長
中原林業代表 中原丈夫様

日本の国土の 3 分の 2 以上は森林に覆われている。日本の皮膚とも言える森林が病み始めている現状を国民は、どのように理解しているのでしょうか？手入れを怠った「肌」は潤いを失い、台風や地震のたびにひび割れて、大きな傷をつくり、深い皺を刻む。春には厄介なスギ花粉などの「膿」まで撒き散らす。さまざまな生き物を育み、水を浄化し、土砂崩れを防ぎ、温暖化の原因となる二酸化炭素 (CO₂) を吸収し、行楽や保養やスポーツの舞台となり、住宅や家具の素材を提供してくれる森林本来の豊かな力を取り戻さなければいけない時期に来ている。



①日本の森林は3度目の危機

我国の森林は、歴史上かつて類を見ない程の木材の蓄積量を誇っているが、実はこの事が、危機的状況にある最大の原因なのである。

第 1 の危機は、幕末から明治にかけての時期で、政治的に混乱が続き、森林の所有者が不透明になる中で、富国強兵や近代化に伴う木材需要が高まったため乱伐ともいえる森林伐採が相次いだ。

第 2 の危機は、大東亜戦争から戦後にかけての時期で、燃料や資材の輸入がままならないため、国内の樹木を大量に伐採した事による。どちらの時期も伐るだけに走って、植えたり育てたりすることを怠ったため、森林が減少し、国土が荒廃し洪水などの被害を招いた。

現在の危機的状況は、少し違う。「伐る」事による危機というより、「伐らない」事による危機といっても過言ではない。先ほども触れたが、日本の森林は、統計上の数字だけ見ると極めて豊かに映る。爛熟状態にあると感じるかもしれない。森林にある樹木の体積を合計したものを「森林蓄積」と呼ぶ。2004 年版の森林・林業白書によると、1976 年当時の日本の蓄積は、約 22 であった。それが、26 の 2002 約 40 に増加している。育成に時間のかかる森林密度が、わずか四半世紀で 1.8 倍になった計算になる。

岐阜県の場合 1970 年⇒約 4000 万 m³、2003 年⇒約 12000 万

全国でも飛びぬけた 3 倍。さらに驚くことは、岐阜県の人工林(スギ・ヒノキ)の森林蓄積量をみると 1970 年⇒約 1400 万 m³、2003 年⇒約 7200 万 m³。5.1 倍に増加している。

戦後の積極的な植林の結果、「ハゲ山」や「やせた山」が減少し、戦後生まれの人工林が、材木として利用できる大きさに育ってきたのである。人工林の蓄積は、天然林の蓄積を追抜き、今や、全森林蓄積量の 58% に達している。

②膨大な蓄積量の意味するもの

本来、人が植えた人工林は、畑の野菜や牧舎の家畜と同様に、人の手入れが欠かせない。しかし、植えっぱなしで、手入れをしない人工林が急速に増えてきたのだ。種をまいただけで、間引きも、除草も、害虫駆除もしない畑や、餌も与えず、疫病対策もせず、しつけもしない家畜のような存在になっている。人工林だけではない。雑木林や里山などと呼ばれた人家近くの天然林も、かつては、炭や薪にするため、あるいは、山菜やキノコや薬草を採るために人が立ち入り、結果的に常に人の手が入っていることが多かった。しかし、炭や薪の需要が減るとともに人の出入りは無くなり、天然林は、前人未到の原生林になってしまった。

人の手が入らない森林はどうなるか？

間伐をしたり下枝を払ったりしないと、栄養分を奪い合って十分に成長できない貧弱な樹木が肩を寄せ合うようにして密集する。枝や葉が重なり合って、地面まで光が届かず、森林全体が暗くなる。光が届かず、土地も痩せてくるから、下草や背の低い樹も育たない。地面がむき出しになって、雨が降るとすぐに土が流れる。多くの動物も住めなくなる。その上、不必要な枝が大量に花粉を撒き散らす。森林が荒れれば、良質な木材が採れないばかりか、役立つ植物も育たないから、益々放置されるという悪循環に陥っている。

人の手が入らない荒れた森林は、森林本来が持っているはずの保水・土砂流出防止・がけ崩れや雪崩・落石防止。多様な動植物の育成と言った多面的な機能を果たせなくなっている。一昨年の台風や集中豪雨を思い出して欲しい。洪水が起こり、地割れが走り、崖が崩れ、土石流が暴れた。これも森林の荒廃と無縁ではないはずである。地球温暖化に伴うこういった気象異変は、これからもより一層多くなるであろう。

③多面的機能を果たせない森林の誕生

答えはの一つは、林業従事者の激減。国勢調査と労働力調査によると、1975年には約18万人いた林業就業者は、2003年には約6万人に減ってしまった。実に3分の1。

森林面積は、それほど多く変わっていないことを考えると、一人当たりの受け持つべき面積が、3倍に増えた計算になる。多少機械化が進んだとはいえ、これでは、手入れが行き届かなくなっても当然である。

林業従事者の激減のわけ

森林全体の6割近くを占める私有林の経営が成り立たなくなってきたからだ。林野庁によると、スギの立木価格は、1980年をピークに下がり続け、今ではピーク時の2割程度までに落ち込んでいる。

スギの山元立木価格：21,548 円/m³⇒4,323 円/m³

一方、就業者1人当りの賃金コストは増えているから林業経営の採算性は大幅に悪化している。価格の下落の要因は、輸入材の激増にある。森林・林業白書によると、1960年に輸入が自由化されて以降、安価な海外の木材が急増し1969年には、国産材を上回りその後も、外材輸入の拡大傾向は続いている。この結果、1955年には、94.5%に達していた木材需給率は、2003年には、18.5%まで落ち込んでしまった。価格の安い海外からの木材が大量に輸入されて市場価格が下落し、国内の林業は苦境に立たされた結果、林業従事者も激減して、手入れが行き届かない森林が増えているという図式なのだ。

④産業面・環境面からの育成

まず必要なことは、国産材の需要拡大である。林野庁によると、1975年には年間91万戸新設されていた木造住宅は、コンクリート製の住宅に押されて52万戸に減ってしまった。建具や家具もアルミや樹脂製が幅を利かせている。木材、特に国産材の良さを浸透させ、木材需給率を回復していくことが重要ではないのか。山村振興も欠かせない。これ以上過疎化が進めば、里山などの荒廃もさらに進む。山間地の自治体の財政再建や、無医村の解消などは、森林の再活性にとっても必要である。環境対策としての森林育成の視点も忘れてはならない。植物は、地球温暖化の元凶となるCO₂を吸収してくれる貴重な存在である。日本を代表するトヨタ自動車のハイブリット車。CO₂の排出量を削減できても、吸収はできません。現代の科学技術をもってしても人工的にCO₂を吸収出来るものはありません。(平成13年試算、岐阜県の森林のCO₂吸収量1666万トン/年)地球上でそれを可能にしているものは、農地と森林なのです。むやみに伐採することは勿論いけないが、森林が豊かに育つように手入れすることにより、より高い機能を発揮させる事は、広い意味での環境対策である。リサイクルが難しいプラスチックの代わりに、再利用ができ、最後は土にかえる木材を多用することも環境対策に役立つはずである。森林が持つ多面的機能の再評価も進めるべきで、保水・侵食や崩壊の防止・水質浄化・二酸化炭素吸収・レクリエーションなどの機能を代替措置に計算すると、総額70兆円に達するとの民間の試算もある。日本の森林の荒廃は、国家の基盤までも揺るがす課題であり、民間の市場原理に任せるだけでなく、国策としての総合的な森林対策。森づくりが求められている。